年　組　番号(　　)　名前

南国チョウ県内に

環境考察

第5部「警告」1

温暖化で越冬、分布域拡大

集めたチョウの標本に視線を送る。標本のうちの一つが、東アジアや東南アジアに分布する南方系のナガサキアゲハだ。「2021年に逢瀬公園（郡山市）で捕まえた。いつかは県内で確認できると思っていた」。標本の持ち主で福島虫の会の三田村敏正(64)＝伊達市＝の表情が緩む。

■北上する生物

ナガサキアゲハは国内にも分布しているが、温暖な九州など限られた地域だった。そのため、三田村は都内で過ごした少年時代や1983年から暮らし始めた県内で見ることはなかった。ところがナガサキアゲハの分布域が拡大、2000年代になって県内で数例報告された。三田村も21年に逢瀬公園で初めて見た。

近年は南方系のチョウのツマグロヒョウモンやクロコノマチョウなども県内で確認されている。「福島に来た当初はほとんどいなかったが、今は普通にその辺を飛んでいる」。図鑑の中の生き物が間近で見られるようになった。チョウ以外にも、ハラビロカマキリやホソミイトトンボなど、関東以西の生き物の報告例が次々と寄せられる。三田村は驚きと同時に戸惑いを覚える。

北上する生き物。要因の一つに、地球温暖化が関係しているのは間違いがないだろう」。昆虫を専門に研究する福島大共生システム理工学類教授の塘忠顕(57)は指摘する。塘によると、チョウは分布域を広げる性質があるものの、寒い地域では冬を越せず定着できない。冬の平均気温や最低気温が上がり、越冬できるようになったことで、県内でも定着できるようになった。

■餌の競合 影響

温暖化などによる植物分布の変化は、それを餌とするチョウにも影響を与える。県内でミカンの栽培は限られる。温暖化で栽培エリアが広がれば、餌とするナガサキアゲハが定着する一因にもなる。

一方で「餌の競合」によって在来種が減ることも考えられる。昆虫の分布の変化で、塘が懸念するのは人への影響だ。例えば、デング熱を媒介する蚊が分布域を広げることで、県内でも発症者が出る恐れがある。農業への影響が大きいカメムシ類も懸念材料の一つだ。「温暖化に伴う生態系の変化によって、一人一人に大きな問題が起こり得ると認識し、何ができるかを考えていくことが大事だ」。塘は警鐘を鳴らす。（文中敬称略）

◇

地球温暖化が人々の生活や生態系に与える影響について考える連載「環境考察」の第5部は、生態系の変化とそれに伴って起こり得る現象を追っていく。

郡山市の逢瀬公園で見つけたナガサキアゲハなど集めたチョウの標本を見つめる三田村さん

ナガサキアゲハ　大型のチョウで、雄と雌で色などが異なる。東南アジアから東アジアにかけて分布し、国内では九州などに限られていたが、30年前に西日本まで分布を広げ、さらに北上して現在では東京近郊でも見られる。名前はシーボルトが長崎で発見したことが由来とされる。

▲ 11月15日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

調べてわかったこと、考えたこと（330字程度）

温暖化は、自然界の生態系にいろいろな影響をもたらしていますね！

福島民友投稿のページ「窓」に送る